

序文

静岡東部地区は、総体としては少子高齢化が進み、空き家率上昇によるコミュニティ弱体化などの地域課題が見られる一方で、三島や長泉といった東京都心まで 1 時間以内に到達できる交通アクセスの良いエリアには、テレワーク浸透をはじめとした働き方の柔軟化により、移住者や2拠点生活者が急増して新しい人流や商流が生まれる、まだら模様の形相を呈している。

世の中全体が「密から分散」に向かう大きな流れの中で、首都圏に隣接する静岡東部地区への人口移動は今後も一定程度は継続するものと思われる。そのこと自体は、コミュニティ維持や活性化の点で歓迎すべき事柄に相違ないが、だからといって、静岡東部が東京の郊外住宅地に模様替えすれば良いものではない。世の中でリモート化が進むほど、リアル体験の質が厳しく問われるようになる。東京郊外の真似ではない、元来地域に潜む魅力を、外部人材の手も借りて顕在化・先鋭化させていくことで、すべての関係人口にとって魅力ある都市空間を形成する必要性が高まっている。

いわば、静岡東部は、コロナ禍による首都圏からの人口流入を受けて、地域全体がアップデートの時期を迎えている。

こうした背景の中で、地元住民だけでは解決できない課題を抱えた地区を対象に、アーティストという「よそ者」の視点や空き家という「無所属の舞台装置」を活用しながら、キュレーター（澤氏）とホスト（日の出企画・山田氏）という「通訳」、地元住民を登場人物とするワークショップを開催した。その結果として見えてきた、地域課題を解決する存在としてのアーティストの可能性、アートとビジネスの埋まらない壁と、だからこそ必要となるキュレーターやホストの存在意義についてレポートしたい。

前提条件と意味合い

言うまでもなく、短期的な経済効果を求めるビジネスのロジックと、長期的な変化を観察するアート界の視点とは対照的である。ビジネスロジックがデジタル的であるとすれば、アート界の視点や感受性はアナログ的であるという言い方ができる。しかしながら、「デジタル田園都市」の言葉や概念に表れている通り、両者の折衷こそが調和のとれた社会のありようとされている今日、現実的な社会課題を解決する上で、縦糸としてのデジタル視点、横糸としてのアナログ視点を組み合わせることは必須条件である。

そこで、両者の掛け橋として、ビジネス側に立ちながらアーティストの価値観や言語を理解する「ホスト」と、アーティスト側に立ちながらビジネスロジックも理解する「キュレーター」という2人の通訳が必要となる。あえて2人の通訳を設けたのは、外交の場面と同じく、言語的表現にとどまらない、細かいニュアンスや世界観の差を、互いの通訳が、薄めることなく差異として認識することで、地域課題解決におけるアーティストの可能性を客観的に評価したいとの意図によるものである。

「無所属の舞台装置」としての空き家は、通常の市場価格では流通しない物件を意図的に選んでいる。そのことで、地域における未活用資産としてだけではなく、不動産市場という既成のビジネスロジックに所属することのない、自由な空間としての意味合いを持たせるためである。

2 拠点でのワークショップとダイアログ

○小山町でのワークショップ

3月9日（水）に予定された会は、県内の感染状況に配慮し、急遽オンライン開催に切り替わった。県のアーツカウンシル、行政職員、地元での活動者など8名が参加した。

「金太郎の里」として知られる小山町は、豊かな自然環境に包まれた風光明媚なエリアで、神奈川県に隣接することから、週末は首都圏からの活動者によるガレージハウスが人気を博する一方、人口減少や少子高

齡化に歯止めがかからない。町内には、「西」「旧小山」「須走」という性質の異なる3つの地区があるが、横串を刺して地域を牽引する存在は見当たらず、活動するプレイヤーがいる割に、個々での取り組みで終始し、地域全体を活性化しきれていない。ゆえに、活動する志を持った人間は、外部へ転出していくため、負のスパイラルが止まらない状況である。

プレイヤーはいても、コミュニティーに発展していない小山町だが、活動障壁があるわけではない。単にプレイヤー同士が集い、つながる拠点が存在しなかったことが原因として大きい。ゆえに、交流創発拠点としての空き家の可能性や、小山町の魅力をアーティストの視点で抽出・表現することの可能性について議論がなされた。どこにも属さない存在であるアーティストや空き家というものが、新しいムーブメントを自由に起こせるのではないかという期待を込めた仮説である。一方で、キュレーターの澤氏からは「アーティストは地域課題を解決するわけではない」という過大な期待をおさえる発言や、空き家を基軸としたコミュニティー形成に着手しているプレイヤー（横山氏）からも、「まずはスモールスタートで小さい渦を作っていく方がよいのではないか」という声も聞かれた。



写真1：小山町オンラインワークショップ
（ファシリテーター濱野氏の自己紹介部分）

オンライン開催であり、深い議論を繰り広げることではできなかったが、まずは既存の空き家拠点を活用しながら、できるところから新しい動きに着手し、その後の反応を見ながら次の展開を練ることが現実的かもしれない。

○三島市でのワークショップ

3月14日（月）に開催された会には、現代美術作家／仏画師、パフォーミングアーティスト／演出家、現代音頭作曲家といった3名のアーティストが参加し、三島の課題、ビジネスとアートの関係、アーティスト×地域活性化の可能性についての議論がなされた。



写真2：三島市でのワークショップ光景
（芝本町での空き家でのセッション）

三島は、東京まで40分という抜群の新幹線アクセスに加え、箱根や伊豆の玄関口であり、三島大社、楽寿園、源兵衛川などの美しい景観を備える観光都市だったが、コロナ禍によるテレワーク浸透により、街のイメージの良さや文化度にひかれて、移住者や2拠点生活者が急増している。東海道の宿場町であったことから、よそ者に対してもオープンな土地柄もあり、地元経営者、地元住民、起業家を含めた移住者の新しいコミュニティも活発化し、さらなる関係人口を呼び込む好循環につながっている。さらには空襲被害を受けていないことで、三島広小路周辺には戦前の看板建築や住宅が点在し、街の隠れた魅力となっている。

一方で、地元の住民や行政が、コロナ禍で一層高まった三島の魅力を、十分自覚しているとは言えない。

魅力を自覚して攻勢をかければ、現状の何倍も活性化する余地があるのに、機会損失している現状に気が付いていない。「首都圏ワーカーは三島だけを見ているわけではない。他の 100 キロ圏都市との競争なのだから、三島が優位にいるうちに魅力を磨かないと」と移住者や 2 拠点生活者がハッパをかけても、豊か過ぎる環境に慣れ切った既存住民には真意が伝わるどころか、よくある「新住民 V S 旧住民」のようなハレーションの種にすらなる。

そこで、アーティストという越境者の出番がやってくる。各アーティストがそれぞれの表現方法で、三島の魅力を発信することで、言語化された表現以上に、より多くの人に抵抗感なく伝わり、街が新しい一步を踏み出すきっかけになる。たとえば、ワークショップでも話題にあがったが、貴重な地域資源である戦前の建築物も、経済的に恵まれた物件所有者が第三者への賃貸を行わないことで、空き家として放置されている事例が散見される。不思議なことだが、彼らは、自らの物件から賃料が発生することを心理的に嫌う。金の匂いのする話を忌み嫌う潔癖さがある。しかし、ビジネスベースから外れた、アーティストの表現の場としての短期利用であれば、使用を許可する可能性が出てくる。もちろん、そこでの表現内容と、現実世界と折り合いをつけるホストの役割が重要であることは言うまでもない。

一方、三島のワークショップに参加したアーティスト 3 名からは、アート×地域活性の可能性について、「地域が求める内容にアート側が引きずられる傾向がある」、「短期的な成果が求められるのはアーティストにとって窮屈」、「アーティスト側の予算感と行政のそれが大きく食い違う」といった率直な意見が寄せられた。また「双方の意見は食い違うので、通訳的な存在は必要」という、ホストとキュレーターの存在意義が示されるコメントも聞かれた。

三島に残された、歴史的な建造物としての価値を持つ空き家で、アーティストが活動して新しいうねりを作り出す際にも、これらの意見は肝に銘じておかねばならない。

2 事例から見るアーティストの活躍可能性

2 拠点でのワークショップとそこでのダイアログを通じて、課題解決者としてのアーティストの可能性が見えてきた。小山町では、異なる特性を持つ3地区において、地域の魅力を発信し、町全体を牽引する活性化の担い手が不在である中で、空き家を拠点に滞在するアーティストが、小山町の「普通の生活風景」の価値を抽出し、地域資源として住民と共有することで、今後の発信の軸を形成できる可能性が確認できた。

三島市では、東京都心への好アクセスや豊かな住環境から、首都圏からの移住者や2拠点生活者が急増し、全体としては活況を呈していると言えるが、街の面白味を形成する裏路地での空き家が目立っている。それらの空き家は、戦災被害を受けていないため、大正期や昭和初期のものも少なくないが、物件所有者の意向により、未稼働のまま留置されているものも少なくない。そこで、物件所有者にハレーションが少ない、アーティストの暫定利用という形で使用許可を取得することで、新しい街の魅力創出につながる可能性がある。願わくは、移住者や2拠点生活者のニーズに合致するコンテンツを、アーティストの力を借りて催行できれば、さらなる活性化につながることは必至と思われる。

以上が、ホストとキュレーターという2人の通訳が確認した、課題解決者としてのアーティストの可能性である。まだ仮説段階であり、今後の検証が必要な状況であることはお断りしておく。

ビジネスとアートの中間地点とは？

ビジネスとアートの中間地点は存在するのだろうか？東京と名古屋の中間地点が焼津であるという意味合いとは異なり、異なる性質を持つ両者に、中間地点が存在するかどうかは、その存在が善であるかも含めて、まだ分からない。現段階では、両者の特性の差異に配慮し、無理に中間地点を求めようとはせず、どうすれば異なる要素を組み合わせ、目の前の課題が動かせるのかを考えた方が現実的ではないだろうか。分かったフリをして、異なるもの同士を綺麗に丸めることは、この取り組みの意義を失いかねない行為だ。

両者の差異性は、現実世界では、時として衝突も産むだろう。たとえば、アーティストはその土地の因習やしがらみから自由であるので、空き家に滞在する期間には、地元住民からすれば眉をひそめたくなる行動もあるかもしれない。しかし、社会的規範や倫理観に抵触しない範囲であれば、その衝突や反発こそ、課題が発生している時には、停滞している現実を揺り動かすエネルギーであり、その向こう側には解決に至る筋道が隠されている可能性もあろう。だからこそ、ビジネス（現実）側とアーティスト（虚構）側に立つ2人の通訳がそれぞれ必要なのだ。

アーティストの存在は、通常の方法では解決できない、トリッキーな局面で発揮されるものではないか。正面突破でうまくいかなかった地域課題を、現実と虚構の被膜に生きるアーティストが扱うことで、新しい断面を切り出し、周囲の空気も変わり、物事が動いていく可能性がある。アーティストは、地域課題そのものを解決するわけではなく、物事の新しい形相を提示することで、止まっていた時計や空気を動かすことなのではないだろうか。一連の取り組みは開始したばかりだが、今後も、現実と虚構の中間地点を浮動する、空き家×アーティストによる地域課題解決の可能性を探っていきたい。

静岡東部は、コロナ禍により生まれた新しい人流を、地域活性化の源として取り込めるかどうかの瀬戸際に立っている。そうした中で、異なる分子を組み合わせる地域課題解決を図るこの取り組みは、静岡東部全体のありようを探るうえで、ロールモデルになりえる可能性を秘めていると確信している。

（監修：有限会社日の出企画・山田知弘）